

「宇摩」という地名



四国中央市はかつて「宇摩」と呼ばれていた。

「宇摩郡(うまのこおり)」という地名が初めて文献に見えるのは、8世紀の初めのこと。河内国古市郡西琳寺文書に「伊予国宇麻郡常里の戸主である金集史挨麻呂(かねあつめのふひとやからまろ)が、弟の保麻呂(やすまろ)を大和国飛鳥寺(やまとのくにあすかでら)で受戒させ、名前を願忠と改めた。」という記録が残されている。708年のことであり、「常里」とは現在の土居町津根のことである。「宇摩」は、1300年以上続く歴史のある地名である。

それ以前は、馬評(うまのこおり)と呼ばれていたのではないかとされている。「馬評」と呼ばれるようになった由来として、一説には、古代、金生川や銅山川で朱金や砂金などを集めていた百済からの渡来人が馬をたくさん飼っていたからだという説もある。彼らは馬についての知識もあり、その飼育も心得ていたので進んで馬を導入利用していた。地方の人びとは驚異の目で眺め、誰とはなしに馬のいる評(郡)、馬評(郡)と呼ぶようになったのではないだろうか。

そして、713年に詔が出され、郡郷里名を二文字の好字にせよという動きの中で、「馬」が「宇摩(麻)」に変わったものと考えられる。

また、「古事記」に宇摩志葦牙彦舅尊(うましあしかびひこじのみこと)と宇摩志麻治命(うましまちのみこと)の二人の「宇摩」の文字が使われている神が登場する。「宇摩」という地名はこれらの神の名の「宇摩」をとったという説もある。

ただ、資料がほとんどなく、正確なことは分からないのが現実である。